

《研究ノート》

W. H. Riehl の『市民社会』論

——Riehl 研究の一駒——

鈴木 幸 壽

マルクス、ヘーゲル、ローレンツ・フォン・シュタインらは、ドイツ社会学史の前史を飾る人びととして、これまで比較的多くの研究成果も出され、見るべき成果も少なくない。しかし、ここで採りあげるリールのばあいには、我国ではもちろん、ドイツにおいてもあまり綿密な研究はされていない。いささかもさびしい。本稿はかれの主書『市民社会』(*Die bürgerliche Gesellschaft* 1851)の成立に関する経緯について述べたものである。

リール (Riehl, Wilhelm Heinrich von) は、1823年に生まれた。イギリスのスペンサーにおくれること僅か3年、フランスのA. コントにおくれること25年、いわばヨーロッパにおいて、社会学が誕生した19世紀初頭から中期にかけて輩出した学者の一人である。にもかかわらず、ドイツ社会学史では、社会学前史に算えられる学者と見なされている。このことは意外に思われるかもしれないが、社会学が、近代市民社会の分析理論として発生したにもかかわらず、ドイツの近代市民社会の成立がすでに英仏に比べかなりの遅れをみた以上、当然のことともいえる。しかし、かれを前史に属する学者とみるか、もしくは否かという問題は、かれの展開した理論が、どこまで社会的であったか、もしくはなかったかという問題につながっているのであって、したがって、この問題を解く鍵は、かれの著述にあらわれた理論体系の内容を

いかに解釈するかという問題にかかわっている。

さて、これまでわが国の社会学者でリールをとりあげた研究者は、かれの主著で上述した『市民社会』を主たる文献として考究したばかりが多い。実はここに問題がある。たしかに書名から受ける感じとしては、社会学者からみて『市民社会』という書名そのものの内容を素直に受けとれば、社会学的著作とみるのは当然である。またそのように考えても決して誤りではない。しかしリールの場合、果して『市民社会』という書物のみがかれの社会学を論ずるに足る十分な資料文献であったのかどうか。このような素朴な疑問が筆者の心底には長い間潜んでいた。そこで最近、改めてこの『市民社会』を読む機会を得て、その中からいくつかの問題点を見出し、リールの解釈についてこれまでの手ばかりを、筆者自身の反省をこめつつ、一般に指摘しておきたいと思う。

『市民社会』の成立

知られているように、リールの『市民社会』は、1851年に、「ドイツ社会政策の基礎としての民族の自然史」(*Die Naturgeschichte des Volkes als Grundlage einer deutschen Sozialpolitik*)という四巻のシリーズの第2巻として刊行されたものである。しかしかれは刊行に先立って、本書の構想を、1847年 *Karls-*

ruhe Zeitung (カールスルーエ紙) に *Der gemeine Mann* と題する論文の中で展開したのである。ここで *Der gemeine Mann* というのは、強いて訳せば「普通人」、あるいは「何の変哲もない当たり前の人間」ということになると思うが、この論文は、かなり当時の人びとに影響を与え、反響を呼んだといわれている。リール自身こうした反響を呼んだ理由について、3点を指摘し、それらを強調したことに起因すると述べている。先ず第一に、この *Der gemeine Mann* は、具体的には、農民とか小市民であり、民族構成員のなかでも、ごく素朴な習慣を身につけた人々を指すと同時に、これらの人々こそがドイツの民族文化の根元の立役者であったこと、従って最終的に高度文化といわれるものも、実はこのような民族文化から流出し形成されたということ。第二に *Der gemeine Mann* のもつ政治面での役割は、保守的ではあるが、自然の力のもつ調和や秩序と一致している点が見受けられる。そして第三として、この *Der gemeine Mann* は、かれらの皮膚で感じとったものであれば、いかに単純であっても、芸術の名に値する文化をもつことができると同時に、むしろそれを誇りにさえ思うということである。もちろんヨーロッパの他の国民は、既に当時輝かしい発展を遂げていたので、ドイツの *Der gemeine Mann* もそれに羨望の念を禁じ得ないものがあったとはいえ、それを体感しない限りにおいて、やはり自国の文化を賞賛するのが当然だ、とリールは言っている。

『市民社会』の全篇を通じて流れている根本的な考え方は、この三点に集約されているが、この小論文が『市民社会』の骨格を形成したとリールは述べている。しかしこの骨格に肉付けしたのは、当時(1848年)に起こったパリの二月革命の影響を受けたドイツの動きであった。二

月革命は衆知のようにパリのブルジョワ共和派と小市民・労働者より成る民衆が七月王政(ルイ・フィリップの王政、1830~48年)を倒し、共和政府を樹立した革命であるが、これがとくに南独では各地に市民革命を起こす誘因になった。具体的には南独で自由主義者51名が3月8日、ハイデルベルグに集まり、次いで月末に全ドイツ統一議会の開催を決定、これが5月にフランクフルト国民議会を成立させることになった。そして他方同年3月18日にはベルリンで革命(市街戦がおこなわれた)が起こり、市民階級を代表するカンフハウゼン内閣を作り、自由主義的流れの道筋を作っている。フランクフルト国民議会の成立もベルリンにおける革命の結果であった。したがってドイツにこの1848年の大きな革命が及ぼした影響は、その後のドイツ社会形成のためにも大きな意義をもっていたともいえる。いみじくもリールは当時を述べた次のように述べている。「世界がしばしばひっくりかえったような気がした。ドイツ国民の核ともいべき *Der gemeine Mann* は依然として思慮があり、毅然とし、多くの攪乱や咆哮にもかかわらず、調停的社会力としての実を上げているのをみて心の安堵を覚えた。」と。

激動する祖国の実相のなかから、リールは自由主義への大きなうねりを感じつつ、その担い手としての *Der gemeine Mann* に対する期待感をふくらませ、信頼の念をもっていた。当時は、ウィスバーデンに住んでいたが、その地でも国民層間での社会的対立がみられたが、かれ自身はそうした社会的対立状況をつづきに見て廻っていた。それらは国民議会をはじめとして、州議会や市町村議会視察を通じてドイツ国民の自然史的研究に従事したのである。この成果は、1850年コッタ(Cotta)出版社から刊行されている *Deutsche Vierteljahrsschrift* に発表された *Der deutsche Bauer und die moder-*

ne Staatであり、これがまた『市民社会』の第一章の骨子にもなっている。

さらにリールの場合、こうした農民を主体とするドイツ民族中核論ともいふべき発想に加えて、Der Vierte Standすなわち「第四身分」という階層の存在が、彼の理論の中心的対象になっている。それまでドイツには、農民層以外に貴族層があり、さらに、資本主義の流入育成の緒についたことから、市民階層が出現し、これら三者が、いわばドイツの階層構造をなしていた。しかしリールは、これら三つの階層以外に、第四身分を設定し、しかもかれらの社会的役割は、伝統的集団としての古い社会集団のもつ身分的意識の払拭にあるとしている。ここから明白になることは、いわゆる市民層といわれるものが、ヨーロッパ社会での市民階級といわれるものとはかなり異質的だ、ということである。リールに依れば、第四身分とは、本質的には農民層でもあるし、市民階層でもあるという、はなはだ矛盾しているかのような捉え方をしているが、かれの場合は、全く新しい種類の階層の出現を考えたのではなく、これまで存在した既成の階層の中で、この激動期に対処して新しい意識と古い意識とを混在させたまま、去就に悩む集団を考えていたと見ることができる。このことはかれが『市民社会』をあくまでも1847年から51年という時代の歴史的事実を忠実に反映したものであると言っている所からもわかる。もちろん1851年になると、事態はかなり安定してきたためにリールの関心は、Der Vierte Standに向けられるばかりでなく、いかなる激動の中にあっても、いわば安定的勢力の有力な集団としてアリストクラシーの存在を認めている。すなわち、この集団の最も明白なカタチをもった都会として、リールはアウグスブルグを例にあげている。かれにとってアウグスブルグは、歴史的な想い出の都会であると同

時に、全く新しいとはいえ、古い豊かな市民が生色に溢れて生活している都会でもあった。つまりかれが1848年に住んでいたウイスバーデンとアウグスブルグとは、かれにとって新しい時代を象徴する対照的都会として映じたのである。1848年のウイスバーデンは、先に述べたDer gemeine Mann 的性格をもつ典型的都市であったのであり、したがってドイツ特有の、かれの考え方から言うと、民族の中核をなす要素的性格をもった都会でもあった。これに対して、アウグスブルグは、新しい時代の波をもとに受け、いわば近代的思考に依存する生活形態をもつ新生都市に変貌をとげたといわれるが、にもかかわらず、1851年という時期においても、依然として、豪族土地所有を基盤とする世襲貴族が支配的であった。すなわち、文字通り封建的支配を特色とするにふさわしかった。

しかし、一方に於いて、世襲的地位の独占や職業の独占について、新しい息吹を受けた貴族がそれを断念し、近代社会の分化過程において、貴族がどうあるべきかを考えた上で、近代化への道をとろうと努力した面も見られるのである。確立された歴史的家族意識をもって近代社会を乗り越えていくということに対して直面する抵抗は、案外強かったのであるが、そこに貴族の帰趨を決定する鍵があったと同時に、貴族が貴族として存続すべき可能性も見出さねばならなかった。こういった意味で、先に述べたウイスバーデンとこのアウグスブルグとは、当時のドイツにおける新旧の象徴であったといえるであろう。しかも単に、両都市の対比が、都市社会学的発想の下で理論化された結果として、時代のシンボルであったと説くのではなく、エコロジカル (ecological) な検討の結果、これだけのことが言い切れたというのは、リール解釈上重視しなければならない点である。

『市民社会』の構成のなかで市民階層 (Bürgertum) に割り振られた章は、最終章ではあるが、要するにこれはリールの本意ではなかった。というのは、かれは「最終章は Vier Stände という章名を付したかったが、出版社の都合で Bürgertum になった」と述べている。かれは、「四つの身分」という章名によって、最終章を飾ると同時に、『市民社会』の総括部としたかったようである。しかしかれは、当時 Stand という言葉を使用すること自体、はたしてどの程度適切であるかという点について、一般の承認を受け難いと思ったことも、Vier Stände という章名をあえて付さなかった理由だったと言っている。しかし、かれとしては心残りがあったらしく、「確かに古い身分は崩壊したが、それは、それに代わるべき新しい身分の出現によるものだ。」とあって、あくまで Stand による Stand の発生という点に固執していることからうかがえる。

このようにして、*Die bürgerliche Gesellschaft* の構成なり、章別なり、配置なりが決定され、出版されたものが、われわれに提供されているのであるが、次に本書に対する一般的評価 (出版当時はもちろん、現在でも) は、リール自身にとって、必ずしも意に満たないものであった点を述べて見よう。

『市民社会』の評価について

先ずリールが強調してやまない点は、先に述べたように、本書が1847年から51年という時期を焦点として書かれたということである。したがって、この時期におけるあらゆる動きは、すべて本書に忠実に反映されているわけである。ここで物語られている多くの歴史、多くの問題は、当時ドイツ国の議会でも問題になり、論議がたたかわせられたことであった。ところが、現在これらの問題群は、すでに解決済の事柄と

見做され、事実、問題としては、どうにもならない問題ではなくなっている。ということは、現在という時点では、これらの問題は、単なる歴史的過去の事実として、人々の関心をひくにすぎない存在になったということでもある。

リールは、本書の価値評価というよりも、書物一般の価値判断の基準を、どこに求めるべきであるかという点について、次のように述べている。「古くなって益々価値のでてくる書物といわれるものが、この世にはかなり沢山あるが、それが価値ありと判定される所以のものが、たとえば冬の梨のように (一般に冬には梨がとれない。したがって冬の梨は価値が高い) たまたま冬に梨があるということによってではなく、実は、梨のもつ特有の味が、この場合でも価値あらしめるのだ」といっている。この梨の例から、結局書物の評価も、内容が、後世の人々に、なにか異なったもの、新しいもの、換言すれば、過去のさまざまな事態を立証し、比較し、熟考するための有力な素材を提供し、読む人に生き生きとした刺激を与えるからである。したがって、書物の価値は、著者の功績は当然の事ながら、実は著者の功績ばかりでなく、その著者がとりあげた素材こそが賞賛され、また貶められるべきであると言う。リールの『市民社会』も、かれ自身に言わせると、上述した一般的書物の評価に洩れず、ここで取りあげた1848年から51年までの、全ドイツの素材に求めてほしいというわけである。

反響を呼んだことは、リールも認めているし、事実、当時、この書物が出版され、多数の読者を獲得したわけであるが、当時の読者は、本書を読んで、肯定、つまり、「リールの言う通りだ。その通りだ。」と積極的に肯定したために、思わぬ反響を呼んだという結果になっている。ところが、現在でもこの書物が反響を呼んでいる謎は、じつは、当時「そうだ、そう

だ」といわれていたのに対し、「こんなことはもうない」という事態がはっきり本書からうかがい知れることによるのである。すなわち、ある程度まで、リールが予言した事態とは、打って変わった状態が出現しているために、逆説的に本書のおもしろさが倍加されるということになっているのである。

単に興味深い、面白いという評価を越えて、さらに内容的に、本書に対して与えられた評価を、どのようにリールは考えていたか。

かれは、1848年という年を *Anregung* と *Unruhe*、一方で、*Ordnung* と *Ruhe* という分極化した両極端の時代だとみている。いわば、このあたりの叙述は、スペンサーの進歩と秩序（これは、社会学では、社会変動論として、静学と動学というカテゴリーで問題になった点）という概念を思い起こさせる程のすぐれた識見であったわけであるが、保守と進歩の両勢力が、1848年を発火点としてドイツに拡がっていた事実を豊かな事例と鋭い筆致で述べたものである。

こうした内容をもつ以上、筆勢おのずから尖鋭にならざるをえないわけで、かれもこの点はなんらちゅうちょなく告白している。ある意味では、言い過ぎ、誇大ということも免れなかったと考えられるが、ただ本書が、この1848年という時代を背景とし、たまたま1851年という反動の年に出版されたため、特別の反響を惹き起こしたのである。したがって1851年という反動の時代の読者は、はっきり二つに評価している。すなわち、一方では、本書を目して、保守主義的であるという見方、他方では、自由な考え方にたって書かれた書物であるという、この二つの相反する極端な評価が与えられているわけで、これははなはだ興味深いといわねばならない。

前者の観方が成立するのは、時代精神という

ものに謙虚に立ち向かわないものは、満足な成果を期待できないという考え方に立ち、後者のばあいには、支配的な精神に反抗しないものは、成果も10年と続かないという考え方に立っている。すなわち、このばあい時代精神というのは、いうまでもなくドイツ的传统の中に、基本的な発想の基盤を求める精神構造であるが、これを忠実に固執すれば、自ら保守的になるであろうし、あくまでも批判や抵抗に立脚すれば進歩（自由主義的）的になるわけである。そして、成果とは、ドイツ民族の将来の発展なり、幸福の可能性ということになるであろうが、保守的であるためには、時代精神のいわばとりこになり、幸福と発展とをそのことによって獲得したり、保証されたりする。一方、進歩的でなければ、それも叶わないということになる。

本書が、果してこのような極端な見方を生むほど、一面ではすぐれていたが、他面それだけに却ってアイマイさを免れえないか、そのいずれかであり、いずれであったかは、次にリールが述べている言葉によって、判断するのが至当である。「著者（リール）の下した結論やさまざまな論証は、政党によってもまたいろいろ論議の対象になったけれども、少なくとも次の二点で、著者としては、原則的な反対者に共鳴したい。第一点は、著者がドイツ民族の認識のために払った忠実、且つ愛すべき献身であり、第二点は、本書に対する確信と独立性である。もちろん著者は、政党、それも支配的な党グループのきまった型に合わせようとしなかったし、またどのような党にもお気に召すようには書かなかった。」この言葉から判断されることは、保守とか反動とか、あるいはまた進歩とかのレッテルを貼られたのは、実は、勝手に政党がこれを利用しようとした、または事実利用したことから起こっている。つまり政策決定や政党としての綱領とか政見の作成のための恰好の資料

として利用されたためである。リールにとってはなほだ迷惑千万なことであつた。本書が党本とされたのは、したがって責任はあくまで政党側にあつたということになる。まことに機微をうがった言だが、かれはさらに次のようにも言っている。「本書は最初是非難されたが、あとになって利用されている。そのわけは、本書が出版された頃の支配的な党や学派が、支配しなくなったときに読まれるようになったから。」このことは、進歩勢力と保守勢力とが、たまたま本書の出版で読まれるという事態と逆になったことを意味している。

そもそも、マルクスの書物にしても、レーニンの書物にしても、少なくとも共産党や社会党に十分利用される所以は、それらが体系的な理論構成をもっているからである。しかるに本書は、これとは全く違っている。少なくとも党本としてみたばあいでも、リール自身が述べているように、決して理論的書物ではない。社会の理念、組織的な構成、身分の近代的な概念、社会の学と国家学の関係、経済学と社会学との関係などについては、一言一句言っているわけではないのにもかかわらず、theoreticalだといわれるのは、甚だ心外だというのである。リールの友人たちが、本書を目して理論書としていることに対して、かれはまた次のように言っている。「それは見当違いもはなはだし。30年前には、体系的に述べようとしなかったし、できなかった。かりに友人たちがそう考えたとしたら、本書は根本的に書き改められねばならないだろう。なぜなら、あの頃から本当に学問的な基礎をもつ社会の学 (Gesellschaftslehre) は、やっと徐々に完成されつつあつたから。」

考えように依つては、リールの弁解とみられなくもないが、こうした本書への評価は、著者のいつわらざる告白としてのあくまで理論的で

なかつたという点と相反する。ここにリール解釈の誤謬も出てくるのである。しからば、リール自身理論にたえうるものとして自信を持って世に問う書物が他にあるべきである。彼は即座にそれは *Die deutsche Arbeit* (1884) であるという。本書にこそ『市民社会』の足らざるを補うと共に、社会の根本概念を發展せしめ、社会の System について充分な論述が展開されている。

したがって、本書はあくまでも practical なものであつて、学校教材的でなく、なまの人間像をそのありのままに写し出したからこそ、実は反響があつたのであつて、いわばリールの像は政治問題の主張に副次的材料としてたくみに結びつけられたということが出来る。完全な姿体を呈しているからといって、必ずしも厳密な意味で秩序立っているとはいえない。このようにみえくると、本書の魅力は、いわば配色の鮮やかさにあるとも言える。

リールが考えているのは、決して理論を無視するというのではない。知り過ぎるくらい理論は重視している。例えば、民族生活の Poesie に対して物質主義を、素朴な民間のロマンティックな呪術師に対して学校教育を、モラルに対しては明白な意識された権利を、幼稚な民族の信仰感覚に対して、批判的知識といったものを常に対置法的に設定した上で、叙述を進めているのをみても、なみなみならぬ理論への傾斜が見てとれるのである。本書は、mit dem Herzen geschrieben であり、これに対して、*Die deutsche Arbeit* は mit dem Kopf arbeiten である。本書が多くの欠陥を含んでいるにも不拘、社会科学上有力な指針を与えた所以は、そして新鮮さと生気を与えたのは、理論を理論としてのみ展開するという科学主義的な傾向にブレーキをかけ、専ら、デカにふれ合つた民族を足場にして述べられた、理論に非ずして、実践の書であ

ったためである。

冒頭にも述べたように、本書が何にもましてリールの社会学体系を知るためのヨスガとして利用され、評価されてきたという事実は、上述したことから、明らかに偏った見方であるといえる。理論は別の所にある。それを発見し、それを検討しない限りにおいて、軽々とリール論を展開することは、はなはだ危険であるといわなければなるまい。にもかかわらず、この書物だけですべて割切った解釈がなされたということは、日本の社会学者の怠慢とばかり言えないまでも、かなり大きなミスを露呈しているとはいえないだろうか。かりに一步ゆずっても、日本の社会学として今後の問題として改めて再提出されるべきではないかという試みが、いまだに出てこないというのも不思議といえば不思議であるが、これは、社会科学の発展という視野からみて、明治以来の息つくひまもない吸収過程では、ある程度やむをえなかった点であったともいえるし、こうなると、日本の社会科学全体の問題として再燃させるべき責任が私にもおわせられそうなので、一先ずここで筆を擱しておく。

<付記>

本稿は33年前に執筆したものであり、印刷のうえ極く限られた一部の方々（前任校東京外大の同僚と共に作った論文集として）に配布されたものであるが、今回新しい文献などを参照し、

手直しをして改めて発表するものである。

なお筆者は本書のCotta版（1861）を所有しているが、これは筆者の東外大時代のドイツ語の恩師 Dr. Walter Röhn の死後、蔵書の整理を先生の妹さんから依頼された時偶然見出し、形見のようなつもりで頂いたものである。発行が1861年、Röhn先生はLeipzig大学ご卒業で法学士、第三版を買求めたようであるが、随所に書き込みがみられる。いかに当時の大学生にもてはやされ必読書であったかがわかる。また1895年には教科書版も出されているが44年後に本書が刊行されていたという事実が何を物語っているのだろうか。

<文献>

- E. Egar : Wirtschaftliche Volkskunde bei W. H. Riehl, in *Schmollers Jb.*, 62. Jg. 1938.
 Carl Jantke : Riehls Soziologie des vierten Standes, in *Soziale Welt*. 2 Jb. 1950/51.
 E. Egar : Artikel.“Riehl” in *HdwB der Sozialwissenschaften* 1954.
 Victor von Gramb : W. H. Riehl., *Leben und Wirken.*, 1954.
 Hannes Ginzel : *Der Raumgedanke in der Volkskunde unter Berücksichtigung W. H. Riehls Diss.*, 1971.
 Wolf Leopenies : *Die drei Kulturen*, 1985.

（すずき ゆきとし 本学科主任教授）